キャンパスで輝く学生を紹介

# キラリ奈教生

**Profile** プロフィール

教育学部学校教育教員養成課程
理数・生活科学コース 3回生
真城（しんじょう） 匠（たくみ）さん 私立清風高等学校出身

中学校時代に出会った生徒思いの先生に憧れ、自身も中学校教諭を志す。2009年夏、附属中学校長でもある谷口義昭教授（技術科教育）から誘われたのをきっかけに、附属中学校科学部のコーチとして活動を始める。昨年の夏には、附属中学校科学部員による地域の小学生対象のロボットセミナーを企画・コーディネートした。

WRO世界大会表彰式にて

## 世界大会出場の附属中学校科学部をコーチとして支える
### ～大切なことを、繰り返し伝えることで、チームをまとめる～

本学附属中学校科学部は、ロボットに関した大会でこれまでに数々の優秀な成績を残してきています。今回は、そんな科学部のコーチとして、昨年、自律型ロボットによる世界大会「World Robot Olympiad (WRO)」(p.21関連記事）に出場した真城匠さんに話を聞きました。

### ロボットとの出会い

「附属中学校の科学部をサポートしてくれないか。」

2009年の夏。真城さんは、附属中学校長でもあった谷口義昭教授から思いもよらない誘いを受け、コーチとしての活動を開始しました。附属中学校の科学部といえば、国内外のロボットコンテストに出場しているクラブ。しかし、真城さんは附属中学校に科学部があることすら、その時まで知りませんでした。それに、大学でプログラミングのことは学んでいたものの、ロボットを作ったことがなかった真城さんは「自分に、いったい何ができるのだろう」と困惑したといいます。

そんな心配も顧問の福田哲也教諭の「技術面はもちろんだが、部員たちの良き先輩として心の面でも支えになってほしい」との一言で変わったといいます。

### コーチとしての収穫は多岐にわたる

附属中学校科学部は、1～3年生まで約40人程度の部員が所属しています。そんな彼らとコーチとして接する中で真城さんは、ただ単に技術の指導方法だけでなく、さまざまなことを収穫できました。

「大きな大会があると、もちろん大勢の部員を連れて行かないといけないんです。ましてやそれが世界となると生徒たちの危険防止だけでなく、体調管理も行いながら大会の練習をしていかないといけなくて、すごく責任を感じました。このような経験は、教育実習などでは、体験できなかったと思います。」

真城さんは、部員と接する上で、ひとつの言葉を大事にしています。それは、顧問である福田教諭から頂いたアドバイス、

「大切だと思うことを、なんども繰り返して伝える」

生徒への指導では、一度のアプローチでは伝わらないこともあるが、大切だと思うことは、繰り返し言うことで、必ず伝わる。

部内での議論の仲裁やプレゼンテーション技術、外国人とのコミュニケーション術に関してのアドバイスなど、コーチとして多岐にわたる活動を行う中で、その言葉は大きな指針となっています。

### 目指すべき姿

活動の中で、時として部員の悔し涙や、逆に今回の世界大会出場の際には、部員の喜ぶ姿に出会ってきました。ものづくりの製作過程では、単に技術力のみならず、創造力や問題解決能力、人間関係力に至る総合的な能力が培われることを、コーチ活動を通じて真城さんは強く感じることができました。そんな真城さんが目指すのは、将来、今回大会でも使用していたレゴなど自己創造性のあるものを、さまざまな授業で活用し、総合的な人間力を培っていける教員です。